

第一次モンゴル調査報告：カザフ「騎馬鷹狩文化」 と「イヌワシ祭り」を通じて

越坂，裕太
九州大学大学院人文科学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1928644>

出版情報：鷹・鷹場・環境研究. 2, pp.65-75, 2018-03-20. Faculty of Arts and Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

<研究報告>

第一次モンゴル調査報告

—カザフ「騎馬鷹狩文化」と「イヌワシ祭り」を通じて—

A Report of the Field Trip in Mongolia [The 1st Season]:

Focusing on a Current Situation of Kazakh Horse-riding Falconry and the Golden Eagle Festival

越坂 裕太

KOSHISAKA, Yuta

はじめに

平成 28 年度より文部科学省科学研究費基盤研究 A「日本列島における鷹・鷹場と環境に関する総合的研究」に基づく共同研究を進めている。その研究計画に基づき、平成 29 年度に第一次モンゴル調査を実施した。

本調査の目的は、モンゴルの鷹狩文化について、現在も実践される狩猟の実見、および狩猟技術が受け継がれていく社会的・環境的要因の観察を通じて理解を深めることにある。特に、モンゴル西部に居住するアルタイ系カザフ人は「騎馬鷹狩猟」の技術を伝えており、これは古代の鷹狩文化を直接的に伝える貴重な無形文化遺産であるとの指摘がなされている¹。しかしながら、近年、生活様式や社会環境の大きな変化にともない、継承者の不足など、伝統的な狩猟の持続が危ぶまれるような事態が生じている。また一方では、「イヌワシ祭り」のように、鷹狩を文化資源として活用する新たな「文化振興」の動きも見られるようになっている。このように、モンゴルの鷹狩文化も新たな局面に差し掛かっているといえるだろう。

こうしたモンゴルの伝統的な鷹狩文化の現状を調査・記録し、様々な視点から比較検討する作業は、日本列島における鷹狩文化・鷹場環境をめぐる諸問題への理解を深める際に有効と考えら

れる。

以下は、第一次調査の記録であり、今後の調査の参考としていただければと考えている。

なお、本稿では調査参加者でもある相馬拓也氏の論考を随所で参照している。あわせてご参照いただきたい。

1. 調査の概要

(1) 期間

平成 29 年 9 月 13 日 (水) ~ 20 日 (水)

(2) 調査地

モンゴル国バヤン・ウルギー県
(サグサイ村、トルボ村周辺)

(3) 調査内容

バヤン・ウルギー県においてアルタイ系カザフ人のイーグルハンター宅を複数訪問し、同地域に伝承される「騎馬鷹狩猟」技術の実見や「イヌワシ祭り」の見学、およびインタビューやドローンを用いた空撮などを通じて鷹狩が行われる自然環境・社会環境の調査を行った。

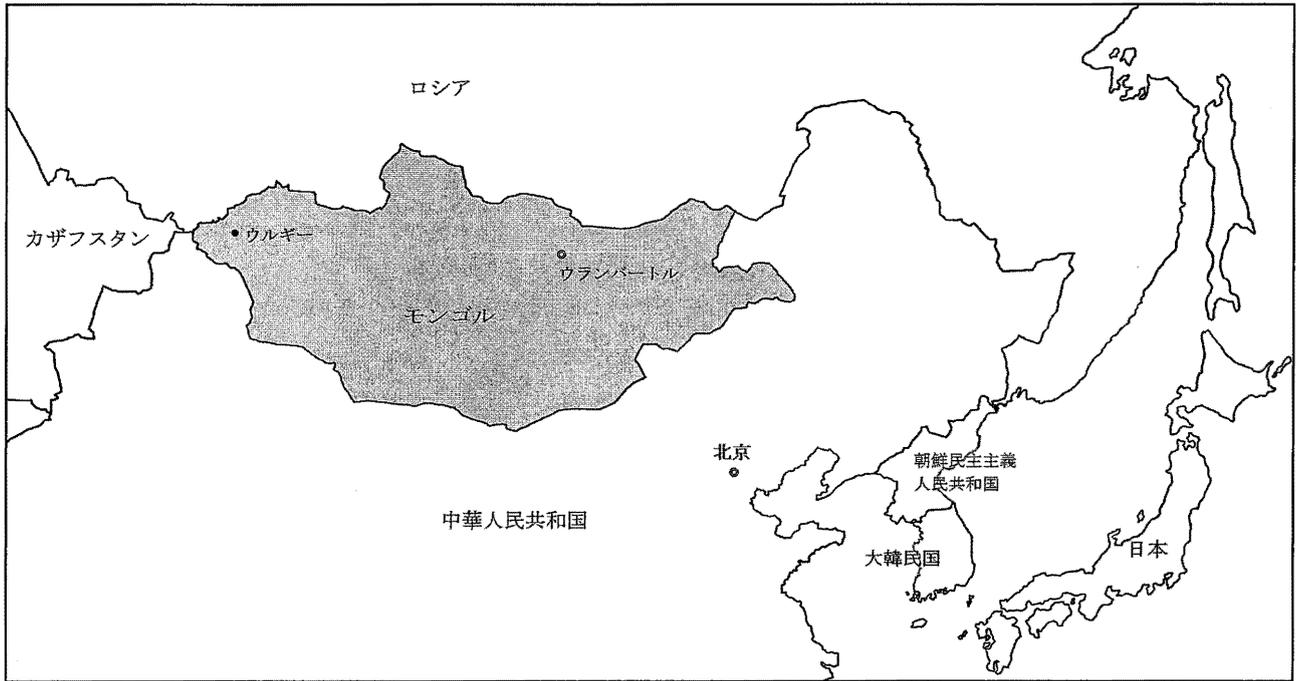


図1：モンゴル国の位置

(4) 参加者

【鷹・鷹場・環境研究会メンバー】

- 岩淵令治 学習院女子大学国際文化交流学部教授
- 相馬拓也 早稲田大学高等研究所助教
- 福田千鶴 九州大学基幹教育院教授
- 越坂裕太 九州大学大学院生（記録係）

ランバートルにて情報収集・危機管理等支援
ナルマンダフ

モンゴル大学日本語・日本文化学科非常勤講師、
ウランバートルにて情報収集・危機管理等支援

【研究補助者】

- 稲田喬晃 動物写真家
- ボロルマー・ウヌルバト
モンゴル大学大学院生、ウランバートルより同行し、通訳（モンゴル語 - 日本語）等担当
- ラシン・アリカン
相馬氏の研究補助者、バヤン・ウルギー県内の通訳（カザフ語 - モンゴル語）等担当
- ジョコブ・ノケオ
バヤン・ウルギー県内の運転手・案内、元陸軍中佐
- ユルベク・スレン
バヤン・ウルギー県内の運転手・案内、元陸軍中佐
- エンフジャルガル
モンゴル大学日本語・日本文化学科准教授、ウ

2. バヤン・ウルギー県の概要

今回調査対象とするバヤン・ウルギー県はモンゴル最西部に位置し、北はロシア、南は中華人民共和国と国境を接している。県都はウルギー市である。首都ウランバートルからは約1,700km離れ、航空機での移動（チンギスカン国際空港－ウルギー空港）には約3時間を要した。また、ウランバートルとの間には1時間の時差が設定されている（UTC+7、日本標準時よりも2時間遅い）。

まず、以下では調査地の概要について、モンゴル国の統計データ（*Mongolian Statistical Yearbook*, National Statistical Office of Mongolia (NSO) 2015）を参照しながらまとめた。また、相馬氏の論文でもバヤン・ウルギー県やサグサイ村の概要が詳細に記されている²。



図2：調査地の位置

地形

面積は 45,700 km²で、九州に沖縄本島を加えた面積とほぼ同程度である³。北西から南東の方向に向けてアルタイ山脈の山々が連なっており、県域の大部分は標高 2,000m 前後の高地となる。

植生を見ると、ほぼ全域が「山岳草原・ツンドラ帯」及び「山岳性森林ステップ帯」から構成されているが⁴、ほとんど木々は見られない。これは、降水量が少ないことに加え、土壌堆積が少ないことから土地の保水量が少ないためであり、周囲の山もほとんど地肌がむき出しとなっていた。

また、河川や湖は各所で見られたが、これらは主にアルタイ山脈の氷河を水源としている。

気候

標高が高いことから、年間を通じて涼しく、ウルギー市の年間平均気温（2015年）は 2.3℃である。特に冬の寒さは厳しく、1月の平均気温は氷点下 16.8℃まで下がる。9月ともなれば、例年降雪が見られるとのことだが、本調査期間中は日昼概ね 15度を上回り暖かく、晴天が続いた。高地のため紫外線量は多い。

また、先述のように降水量は少なく、年間降水量（2015年）は 102.3mm である⁵。

交通・移動

住民の交通手段は、ウルギー市内外ともに自動車やバイクが主流であり、鉄道は存在しない。草原では馬やラクダなどの家畜に乗って移動する人も見られた。

県都ウルギー市を中心として県内各村への道路が伸びているが、市内を除けばほとんどの道路が非舗装であり、草原の中に点在する遊牧民の家を訪問する際には、道路を外れて草原を走行することになる。こうした道路事情もあつてか、公共交通機関はあまり見られず、主要な村へ向けては乗合のジープが運行されていた。

ただし、近年では家畜の乳などの効率的な販売のため、消費地近郊の道路沿いを選んで牧畜の拠点置くケースも見られるようである⁶。また、アルタイ山脈周辺の鉱山資源輸送を目的に中国資本によって建設された道路も見られた。

なお、本調査ではウルギー市内のホテルを拠点にし、現地のドライバー（ジョコブ・ノケオ氏、ユルベク・スレン氏）が運転する 2 台の車両にて調査地へ移動した。

人口

バヤン・ウルギー県の人口（2015年）は約 23,100 世帯 100,200 人で（国内総人口：3,057,800 人）、モンゴルの 22 の行政区画（ウランバートル市を含む）の中では 7 番目に多い。

県内人口の約 80% が移動牧畜の従事者（マルチン）であり⁷、家畜の餌となる良質な草を求めて季節毎に拠点を移しながらの生活が営まれている。

また、人口の 90% 以上をアルタイ系カザフ人（以下、カザフ人）が占め、カザフ人の自治県となっている。モンゴル語の他にカザフ語も公用語とされており、学校教育も含め、現地で日常的に

用いられるのはカザフ語である。現地住人へのインタビューも基本的にカザフ語を用いて行われた。

「騎馬鷹狩猟」について

最後に、今回の調査対象となるバヤン・ウルギー県のカザフ人による鷹狩猟について簡略にまとめておく。

カザフ人のイーグルハンターが飼養するのは、イヌワシのメスのみであり、捕獲対象はキツネにほぼ限定し、出猟は必ず騎馬によって行われるなどの特徴がある⁸。捕獲したキツネの毛皮はカザフの伝統的装束には不可欠な毛皮材として市場で販売されるが、こうしたキツネなどの中型獣を捕獲するためには、最大級の猛禽類であるイヌワシが適していると言える。また、メスを用いるのは、オスよりも体格が大きく、爪の大きさや握力で勝り、ヒナに餌を与えるために狩猟能力が高いからであるとされている⁹。

相馬氏は、騎馬による鷹狩出猟の形態を「騎馬鷹狩猟 horse-riding falconry」とし、古代の鷹狩文化の起源との直接の系譜を示唆するものとして捉えている。そしてさらに、こうした「騎馬鷹狩猟」を伝えるのは現在では唯一バヤン・ウルギー県のカザフ人のみであり、貴重な無形文化遺産であるとしている¹⁰。

なお、本稿ではイヌワシを用いた狩猟も含めて「鷹狩」という用語を用いている¹¹。

3. 活動の記録

以下では、バヤン・ウルギー県において実施した具体的な調査活動について記録する。

(1) 自然環境の概観調査（9月14日）

調査1日目は、ウランバートルから航空機で移

動し、正午前にウルギー空港に到着した。午後は翌日からの本格的な調査に備え、ウルギー市内の県立博物館、展望台、市場やモスクを訪問し、現地の自然環境や現地カザフ人の生活環境に対する理解を深めた。

バヤン・ウルギー県博物館

1階では、イヌワシ・ハイタカ・ハヤブサ・フクロウ等の猛禽類を中心に、カモ・ガン・ツル等の鳥類、キツネ・ユキヒョウ・アルガリ・アイベックス等の動物の剥製標本が展示され、県内に生息する動物の生態環境を紹介している。2・3階ではカザフ人のゲル(カザフ語ではキグズ・ウイ)や民族衣装をはじめとする生活用品、狩猟道具の展示があった。

入館料(5,000MNT¹²)と別に5,000MNTを支払うことで写真撮影も可能であったため、鷹狩猟に関連する動物標本や狩猟道具の撮影も行った。
[写真1]

友好の丘展望台

ウルギー市北東の郊外の山上に位置し、市内を一望できるほか、遠方の村々についても見渡すことができる。ここで周辺の地形や景観の観察を行った。内容は、「地形」や「気候」でまとめたとおりである。[写真2]



写真1：キツネを捕獲するイヌワシ
(バヤン・ウルギー県博物館展示)

市場・モスク

ウルギー市内の市場では、食料品や生活用品が販売されていた。近年はスーパーマーケットの利用も増えているが、肉類の調達などは市場の精肉店が多く利用されるとのことである。

続いて訪れたモスクでは、2件の結婚式の様子を観察することができた。調査を行った9月は牧閑期にあたることから多くの結婚式が行われる。カザフ人の宗教はイスラム教であり、行く先々の村々でもモスクが建っていた。

(2) イーグルハンター宅訪問① (9月15日)

調査2日目となる15日(金)は、トルボ村方面に居住するイーグルハンター宅を訪問して鷹狩猟に同行させてもらう計画であり、朝から活動を開始した。

イーグルハンターの多くは家畜を連れて季節ごとに移動しながら牧畜を行っているが、必ずしも前年までと同地点にゲルを設置しているとは限らない。そこでまずはイーグルハンター達の居住地を割り出す作業が必要となる。今回は、トルボ湖畔の集落やトルボ村において聞き込みを行い、オロスバイ氏を訪問することとなった。

オロスバイ氏宅

オロスバイ氏はトルボ村から車で20分ほど離れた地点に2基のゲル(うち1基は息子家族が居住)を張っていた。ゲルの周囲では羊・ヤギ・牛・

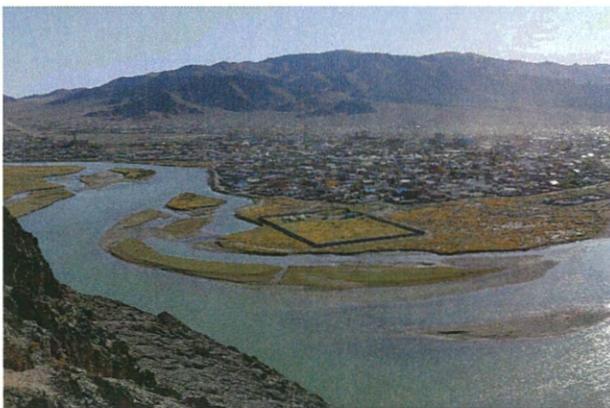


写真2：友好の丘展望台からの景観

馬を放牧していた。また、ソーラーパネルを設置し、太陽光発電により自家電力をまかなっていた。

早速相馬氏より、鷹狩猟へ同行させてもらうことを依頼したが、「今年はカンソナルがまだであるため狩りには行けない」との返答であった。「カンソナル」とは、初雪が積もることであり、降雪により獲物が目立つようになるのを待ってから狩猟を開始するのだという。そこで、ゲルの近くで飼育するイヌワシの様子を観察させてもらうこととなった。[写真3]

イヌワシの飼育の様子

狩猟用のイヌワシは、ゲルから約200m離れた地点で飼育されていた。小川のそばを選んでいるようである。オロスバイ氏所有ワシの他にも2羽が繋がれており、あわせて観察した。

飼育設備は、ワシが逃げないように両脚をそれぞれ縄で括って重石につないだだけの簡素なもので、雨風をしのぐ屋根や囲い、他の家畜やオオカミなどから防御するような仕掛けは一切無い。また、ワシに頭巾をかぶせて目隠しをするようなこともなかった。縄は0.5~2m程の長さであり、この長さの分が行動範囲となる。よって、筋肉が衰えてしまうため定期的な訓練を行う必要がある。

3羽のそれぞれの様子についても記録しておく。

写真4のイヌワシは「バラパン」¹³と呼ばれ、



写真3：オロスバイ氏への聞き取り
(手前中がオロスバイ氏)

0歳から満1歳齢にかけての若鷹と思われる。若鷹ほど羽根が黒々としているが、このワシの羽根も黒く、まだ白い綿羽も目立った。白羽は幼鳥期からのものだが、換羽が進行中であり、周囲には抜けた羽根が多数落ちていた。

写真5は、2から3年目（満1歳～満2歳齢）にかけての「テルネック」か「タス・トゥレク」と思われる。年齢を重ねるにつれて、羽根は褐色化し、首の黄色・ゴールドが目立つようになるが、この特徴が表れつつある様子であった。このワシは警戒心が強く、我々に対しても盛んに威嚇してきたことから、写真4の若いイヌワシとともに「コルバラ」（巣鷹。巣立ち前の時期に巣から捕獲して育てられるため、罟等で捕獲されたワシと比較して人間への恐怖心が少ない。）と予想された。

写真6は羽根の状態から成鳥と思われる。我々が近づいても落ち着いた様子であった。

なお、他の家畜と同様に、イヌワシに特定の名前を付すことは無い。飼養上は生まれて何年目かという区別が重要であり、「バラパン」、「テルネック」等の語彙が充実したようである¹⁴。

狩猟への同行をあきらめ、イヌワシの訓練の実見を依頼したところ、午後の予定を済ませた後であれば構わないと許可を得た。そこで、午後からはオロスバイ氏に同行し、結婚式の前夜祭の様子¹⁵などを観察していたが、オロスバイ氏の会合が長引き、この日の同行は断念することとなった。



写真4（左上）：バラパン
写真5（右上）：テルネック
写真6（左下）：成鳥

(3)イヌワシ祭りへの参加(9月16日・17日)

16日(土)と17日(日)はMongolia-Altai Eagle Festival 2017(以下、イヌワシ祭り)に参加した。このイベントは、サグサイ村近郊のイーグルハンター達の鷹匠としての腕前を競い合うものであり、地元の旅行社が中心となって2000年から開催されている。近年は知名度も上がり、特に外国人観光客への人気が高く、バヤン・ウルギー県の観光資源ともなっている。

開会式

開催地となるサグサイ村はウルギー市から南西に約30km離れた地点にある。村の入口で車を止められ、外国人は参加費として1人30USDを支払う(2日間有効)。料金と引き換えに参加証が渡され、首に下げて参加した(モンゴル国民は無料)。同時に配布されるプログラムには、10時開会と記載されていたが、実際に開始されたのは11時頃であった。

開会式では、伝統的な衣装をまとい騎乗したイーグルハンター達が右腕にイヌワシを据えて整列しており壮観であった。出場者の正確な人数は把握できなかったが、55名程度と思われる。うち2名は女性であった。ただし、全員が実猟を行っているわけではなく、競技への参加を目的にワシを所有する人も増えているようである¹⁶。したがって、参加者の技量にも差が見られた。

[写真7]



写真7：会場を駆けるイーグルハンター達

会場の様子

競技会場は、事務局のテントや審査員・審判らの机と椅子が設置されているだけの簡素なものであり、砂地の空間に小石を並べて競技の区画の目印にしていた。また、イヌワシを用いる競技の会場は高さ約 20m の丘を起点に設置され、その丘の上からワシを飛ばしていた。[写真 8]

主催者側の発表によると、「48 か国からの参加者（観客）が集まった」とのことであり、200 名程度の観客の内の約 3 分の 1 がサグサイ村近郊の地元民を中心としたモンゴル国民、3 分の 2 は国外からの観光客と推察される。観客席は設けられず、参加者は基本的に自由な場所で見学することができた。大会アナウンスはカザフ語かモンゴル語で行われ、英語によるアナウンスはほとんど無かった。

会場周囲には、飲食物や民芸品を扱う出店が複数見られた。また、3 名の警察官が会場の警戒にあたっていた。

以下では、各競技について概要を記録する。

ブルクット・チャクル（イヌワシの呼び戻し）

ワシを手元に呼び戻す早さや技術を競い合う種目である。競技は 1 人ずつ行われ、出場者が丘の下でワシの餌となる生肉やウサギの足などを手にもって振りかざし、「セヤー」、「ホーッ」、「カーッ」などと声を張り上げて丘上のワシを手元に呼び寄せる。呼び寄せは基本的に騎乗した状態で行われるが、下馬して、大きな動作で肉を投げ上



写真 8：丘上から見た会場の様子

げる出場者も見られた。ただし、丘から約 30m の地点には小石が並べられており、出場者がそのラインを越えて丘に近づいた場合や制限時間を越えた場合には失敗となる。[写真 9]

この競技は、狩猟の途中ではぐれてしまったワシを呼び戻す場面や、狩猟に成功したワシを獲物から引き離す場面を想定している¹⁷。イーグルハンターにとって必須の技術であるとともに、ワシとの信頼関係を築けているかも試されることになる。

丘上のワシには飼主の家族が付き添い、ワシは腕に据えられた状態で待機していた。順番が来ると、家族が所定位置に立ってワシの目隠し（トモガ）を外し、腕の上、もしくは岩の上に据えて飛び立つよう促す。しかし、日頃見慣れぬ大勢の観客を前に緊張するのか、飼主の呼声を聞いてもなかなか飛び立たないワシが多く、飼主とは全く別方向に飛んで行く場合もあった。呼び戻しに成功した出場者は全体の 3 割ほどであった。

チュルガ・タルトゥ

ブルクット・チャクルと同様に、騎乗した出場者が丘上のワシを呼びよせる競技である。

ただし、チュルガ・タルトゥの場合は実猟を想定した訓練であるため、呼び寄せには「疑似餌（チュルガ）」を使用する。疑似餌には、実際にワシに狩らせようとする動物（キツネ・ウサギなど）の毛皮の先に生肉を括りつけたものが用いられ、それを 5 m 程の長さの紐の先に付け、馬上からあ



写真 9：飼主の手元の肉にとびかかるイヌワシ

たかも獲物が逃げるかのように動かしていた。疑似餌を用いるという点を除いては、ブルクット・チャクルとほぼ同じルールであり¹⁸、呼び寄せる速さなどが審査の対象となる。大会プログラムには、「真の狩猟能力が試される競技」と記載されていた。[写真10・11]

この競技は2日目に行われたが、1日目と比べ観客数が減ったこともあってか、前日のブルクット・チャクルより成功率は高かった。

クズ・コアル（姑嫁追い）

今年結婚した新婚夫婦をはじめとする男女一組がペアとなってそれぞれ馬に乗り、女性が男性を鞭などで叩きながら150m程の距離を駆けていく中央アジアの伝統的な遊び。男性は一切抵抗せずに逃げることでされており、会場の笑いを誘っていた。

また、国外からの観光客も飛び入りで参加し、拍手を受けながら駆けていた。[写真12]

コクバル（馬上相撲）

死んだ羊の胴体（首を落とし、血抜きをしたもの）を奪い合う競技。騎乗した2名が対一で羊を全力で引っ張り合い、いずれかが完全に奪い取るまで続けられる。勝者は2回戦に進み、勝ち抜き方式で行われる。白熱してかなり遠方まで駆けていく試合もあり、会場全体が非常に盛り上がっていた。荒々しい競技のため馬にけられて負傷者が出ることもあるそうだが、今回は特段のトラブルは生じなかった。警察官は特に厳重に警戒していた。[写真13]

上記の他、カザフ人の伝統的な弓術やラクダのレース、馬上から地面の花を拾う競技も行われた。

2日目の競技終了後はウルギー市内のカザフ劇場に移動し、カザフの民族音楽を中心としたコンサート、主催者挨拶、優勝者の表彰（賞金、副賞のバイク贈呈など）が行われた。

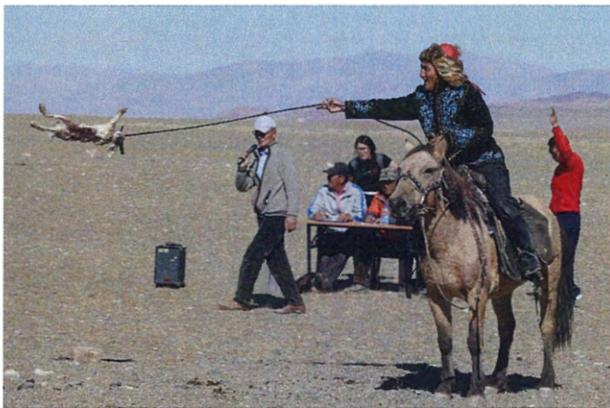


写真10：疑似餌（チュルガ）を操る出場者

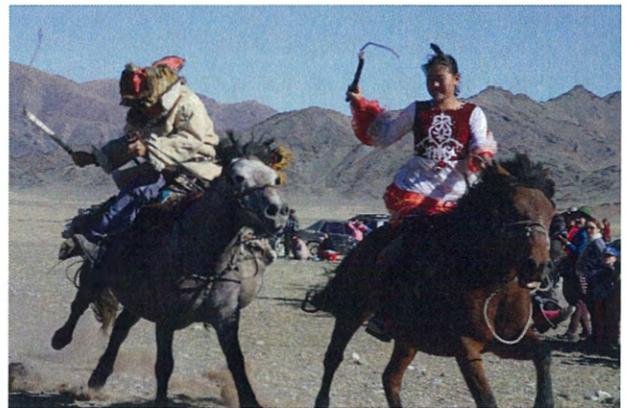


写真12：クズ・コアル



写真11：丘の上から放たれるイヌワシ

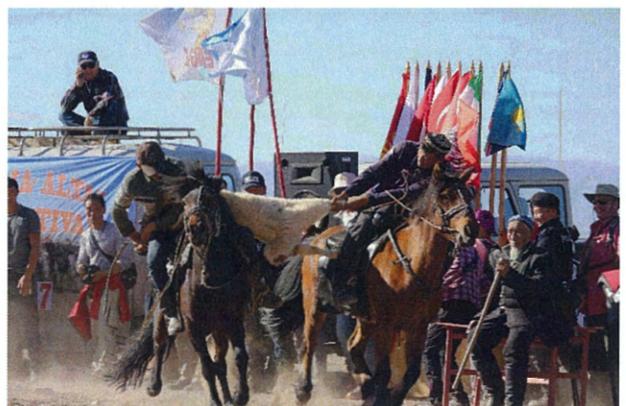


写真13：コクバル

(4) イーグルハンター宅訪問② (9月18日)

調査5日目となる18日(月)は、15日に断念していたイーグルハンターの訓練に同行する計画であり、ジンスベク氏宅を訪問した。

ジンスベク氏宅

ジンスベク氏は、サグサイ村からさらに8kmほど進んだ地点のブテウ冬牧場で、両親・弟らと生活している。彼はコクバルのモンゴル代表として国際大会での優勝経験を持ち、前日の競技でも見事優勝している。ゲルの中には様々なトロフィー、メダルが飾られていた。

ゲルの前では、ヤギ・羊・馬などの家畜を飼育していた。隣接地には日干し煉瓦の固定家屋や厩舎が建てられており、調査時期には無人であったが越冬時に使用される。

イヌワシの様子

ジンスベク氏のイヌワシは2歳のテルネックで、ゲルのすぐ前で木製の三脚(トゥグル)の上にとめられていた。

体尺測定を行ったところ、頭から脚までの体高は約50cm、頭から尾までが約80cm、翼の開張幅は約180cmであった。また、脚の爪は削られていたが、これは獲物の毛皮を傷つけないようにするためである。腕にも据えてもらったがかなりの重量があり、騎乗しての狩猟や長距離移動にはかなりの熟練が必要と感じた。



写真14: 疑似餌(チュルガ)を捕獲したイヌワシ

訓練の様子

訓練場まで、ジンスベク氏はワシと共に馬で移動する。我々は自動車移動のため約30分で到着したが、馬での移動には約1時間を要した。移動時には、先が二股になった木製の棒(バルダック)を用いてワシを据えた腕を支えていた。また、訓練に用いる疑似餌は馬の腰の両側に下げた革袋に入れて持ち歩いていた。訓練には熟練のイーグルハンターである父親のセリック氏が同行し、様々な手助けを行っていた。

本日の訓練は、イヌワシ祭りで見学したブルクト・チャクル、チュルガ・タルトゥと同様のものであり、セリック氏が山の上でワシを腕に据え、餌を持ったジンスベク氏が騎乗して呼び寄せていた。目隠しを外されたワシは即座に飛翔を開始し、正確にジンスベク氏に向かっていった。[写真14・15]

何度か訓練を繰り返した後で、相馬氏・稲田氏がイヌワシの胴体に360度カメラを取り付け、飛翔時の撮影も行った。当初、カメラを装着したワシはうまく飛翔できずに、すぐに着地してしまっていたが、さらに高い標高から、向かい風に向けてワシを飛ばすことにより滞空時間が伸び、貴重な映像の記録に成功した。[写真16]

以上の流れで、バヤン・ウルギー県での調査は完了した。



写真15: 餌をついばむイヌワシ: 訓練中の摂食は少量に止め、目隠しを被せて興奮を鎮めていた。



写真 16：カメラを装着したイヌワシ

おわりに

以上、カザフ「騎馬鷹狩猟」に関する調査をまとめた。日本の鷹狩文化との共通点あるいは相違点が随所に見出せるのではないかと思う。また、写真・動画による記録も作成したので、研究会内で共有し、活用していただければと考えている。

ただし、今回の調査は訓練に限定されてしまい、実際の狩猟には及ばなかった。カザフ人の鷹狩猟が毛皮材獲得を目的として実践される以上、実猟の調査が不可欠であり、気温が確実に下がる時期を選んだ上での再調査が期待される。

最後に、本調査では「騎馬鷹狩猟」がバヤン・ウルギー県の豊かな自然環境とカザフ人の遊牧社会を背景に継承されてきた点を確認することができた。しかしながら、伝統的な狩猟活動の周囲では様々な変化も進行している¹⁹。鷹狩は人間社会において継承されてきた文化であるが、同時に、自然との共存関係を欠いては成立しえない。今後の調査においても、タカと人間それぞれを巡る自然環境・社会環境の変化をいかにして捉え、分析していくかが重要となるだろう。

<付記>

調査の実施にあたり、現地の多くの方々の協力を得た。また、相馬拓也氏には各種調整を全面的に引受けていただいた。記して感謝を申し上げたい。

<謝辞>

本研究は、JSPS 科研費 JP16H01964 の助成を受けたものである。

調査の経過

時間は現地時間、「※」印箇所にて時差修正

9月13日(水)

15:20	成田空港出発(モンゴル航空OM502便)
※ 19:40	チンギス・カーン国際空港到着
21:15	宿舎着(ウランバートル市内)

9月14日(木)

5:10	宿舎出発、チンギス・カーン空港へ移動
7:30	チンギス・カーン空港出発(フヌ航空MR181便)
※ 9:40	ウルギー空港着、現地ドライバーと合流
10:30	宿舎チェックイン(ウルギー市内)
13:30	バヤンウルギー県博物館見学
15:00	友好の丘展望台にて景観観察
16:00	モスクにてカザフ民族の結婚式を見学
16:30	市場の見学
21:00	宿舎着

9月15日(金)

7:20	宿舎出発
8:00	トルボ湖畔の集落で情報収集
9:50	トルボ村で情報収集
10:30	オロスバイ氏宅訪問(インタビュー、イヌワシ観察)
14:00	結婚式前夜の集まりを見学(トルボ村近郊)
18:30	トルボ村の学校(地区の会合)、調査終了
19:30	宿舎着

9月16日(土)

9:20	宿舎出発
10:00	ラシン・アリカン氏宅(サグサイ村)訪問
11:00	イヌワシ祭り開会式
11:45	ブルクット・チャクル
13:00	
15:00	クズ・コアル
15:30	
16:00	コクバル
17:30	イヌワシ祭り1日目競技終了
19:30	宿舎着

9月17日(日)

9:00	宿舎出発
9:40	ラシン・アリカン氏宅(サグサイ村)訪問
10:30	イヌワシ祭り2日目見学
10:45	チュルガ・タルトゥ
12:00	
13:00	ラクダレースなど
15:00	イヌワシ祭り2日目競技終了
18:00	イヌワシ祭りコンサート(ウルギー市内劇場)
20:00	宿舎着

9月18日(月)

10:00	宿舎出発
10:40	ラシン・アリカン氏宅(サグサイ村)訪問
12:00	ジンスベク氏宅(ブテウ冬牧場)を訪問
14:00	イヌワシの狩猟訓練を実見、360度カメラによる撮影
17:00	調査終了
19:30	宿舎着

9月19日(火)

8:00	宿舎出発、ウルギー空港へ移動
9:50	ウルギー空港出発(ムルン経由、フンヌ航空MR184便)
※14:30	チンギス・カーン空港到着
15:15	宿舎(ウランバートル市内)チェックイン
16:00	モンゴル民族博物館見学
19:30	宿舎着
9/20(水)	
6:00	宿舎出発、チンギス・カーン空港へ移動
7:50	チンギス・カーン空港出発(モンゴル航空OM0501便)
※13:30	成田空港到着

註

1 Soma Takuya: Ethnoarchaeology of horse-riding falconry (*The Asian Conference on the Social Sciences Conference Proceedings 2012*, 2012年)、相馬拓也「騎馬鷹狩文化の起源を求めて—アルタイ山脈に暮らすカザフ遊牧民とイーグルハンターの民族誌—」(『ヒマラヤ学誌』18, 2017年) ほか。

2 相馬拓也「モンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村における移動牧畜の現状と課題」(E-journal GEO Vol.9 (No.1)日本地理学会、2014年)

3 相馬 2014 前掲論文。

4 相馬 2014 前掲論文。

5 比較対象として、東京の年間降水量(2015年)は1781.5mm(気象庁気象データ)。

6 相馬 2014 前掲論文。

7 相馬 2014 前掲論文。

8 相馬拓也「アルタイ＝カザフ牧畜社会における騎馬鷹狩猟～イヌワシと鷹匠の夏季生活誌についての基礎調査～」(『ヒトと動物の関係学会誌』32, 2012年)、同「アルタイ＝カザフ鷹匠たちの狩猟誌モンゴル西部サグサイ村における騎馬鷹狩猟の実践と技法の現在」(『ヒトと動物の関係学会誌』35, 2013年) ほか。

9 相馬 2012 前掲論文

10 Soma2012、相馬 2017 前掲論文。

11 日本では、タカ目タカ科に属する鳥のうち大型の種をワシ、中型から小型の種をタカと便宜的に区分することが多いが、厳密な分類法に基づくものではなく、ハヤブサ科の鳥を含める場合もある(「タカ」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』小学館、1994年))。つまり、日本の「鷹」は上記鳥類を総称した上位概念として使用されている。

12 モンゴルの通貨はトゥグルグ。本稿執筆時(2017.10.1)のレートは1 MNT=0.0459JPY(1,000円=約21,800トゥグルグ)。

13 換羽回数に応じた年齢別名称が与えられる。

相馬氏の調査によれば、11年目(10歳齢)まで呼び分けられるが、それぞれの呼称が意味する年齢やその呼称自体が驚使いにより異なる場合もある。(相馬拓也「カザフ騎馬鷹狩文化の宿す鷹匠用語と語彙表現の民族鳥類学」の表1(野田研一・奥野克己編『鳥と人間をめぐる思考』勉誠出版、2016年))

14 成長過程に応じた呼称について、日本や中世イギリスとの類似性が指摘されている。(相馬 2016 前掲論文)

15 有力者の子息の結婚式で、地域の長老達が出席していた。宴会場となるゲルの隣では祝膳に供する羊の屠殺も行われていたが、屠殺の様子を見ることは拒否された。家畜の屠殺・解体では、屠殺は男性、内臓処理は女性が行うというように様々な決まりが存在する。

16 相馬氏は、「デモンストレーター化」したイヌワシ所持者が増加する一方で、精度の高い馴致や飼育方法を継承する驚使いが減少し、これまで伝承されてきた環境共生観や伝統知が実践されにくくなっている現状を指摘している。

例えば、4～5年間狩猟を共にしたワシは性成熟を機に捕獲した山に「産地返還」されてきたが、こうした共生的慣習が薄れつつある。一方で商業目的によるワシの売買・取引は増加傾向にある。こうした点も踏まえ相馬氏は、地域・行政レベルにおいて、イヌワシを「自然／文化双方の資源」として定義し保全していくことの必要性を提起している。(相馬拓也「カザフ騎馬鷹狩文化のイヌワシ捕獲術／産地返還にみる環境共生観の民族誌」(E-journal GEO Vol.11 (No.1)日本地理学会、2016年))

17 訓練の方法については、相馬 2012 前掲論文、同「驚使いの民族誌—モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化が育むイヌワシ馴化の伝統知」(『文化人類学』80/3, 2015年)に詳しい。

18 ブルクット・チャクルの場合は手で持った肉を餌にワシを呼び寄せ、飛んできたワシをそのままキャッチするように手元で捕まえて腕に乗せる。これに対しチュルガ・タルトゥでは、ワシは実猟と同様に飛びかかるようにして紐先の疑似餌を捕獲するため、出場者はいったん下馬し、ワシを餌から離して腕に据えていた。

19 本文中で触れなかったが、1990年代以降の社会主義経済から市場経済への移行過程で、遊牧生活者達は牧畜経営、消費構造、土地所有等に関する諸制度や社会環境の変化への対応を迫られ、世帯間格差も拡大している。